

溝上慎一の教育論(動画チャンネル) No392

大学教育研究フォーラム講演録

高等教育は改革進まず沈んでいくのか、それとも…

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問
東京大学大学院教育学研究科 客員教授

<https://smizok.com/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。

*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。

※公益財団法人電通育英会の研究委託を受けて行われています。

※本動画では字幕を付けていませんので、必要な方は「設定」で「字幕オン」にしてご利用ください。

No385

溝上の講演のご案内

高等教育は改革進まず沈んでいくのか、それとも…

大学教育研究フォーラム
2026年2月17日(土) オンライン



大学関係者はもちろんのこと、高校関係者にも聞いてほしい。大学の実情を知ってこれからの大学教育、高校生の大学進学を考えてほしい！

動画チャンネル「溝上慎一の教育論」



第32回 大学教育研究フォーラム

全国の大学教育改革実践者と交流できます。発表できます。徹底的に学べます

日程

2026年2月17日(火) - 2月18日(水)

第32回大学教育研究フォーラム 開催いたします。

「第32回大学教育研究フォーラム」を、2026年2月17日(火)・18日(水)に開催することになりました。

本フォーラムは、今回で32回目を迎えます。30年近く運営母体であった京都大学高等教育研究開発推進センターが2022年9月末に廃止された後も、京都大学大学院教育学研究科高等教育学コースの協力を得て継続しています。

長らく3月中旬に開催してきましたが、3月は新年度準備で慌ただしといったお声を受けて、今回は2月中旬に開催することにしました。また、オンライン開催になってからは、ポスター発表の充実をはかってきましたが、敷居が高いというご意見もあり、今回から、個人研究発表は口頭発表のみとしました。さらに、今回は、特別講演に代えて、ワークショップを取り入れました。

一方、前回から始めた優秀発表賞の制度を今回も継続します。昨年、初の受賞者が2人生まれましたが、予想以上に受賞者を励ます力があると実感しました。ぜひ参加者のみなさまの手で若手を元気づけ、大学教育研究・実践のいっそうの活性化に力を貸していただければと思います。

多くの学会が対面開催に戻す中で、本フォーラムは今回もフルオンライン開催です。スタッフや予算の不足により対面開催が困難だという事情もありますが、オンラインのよさを最大限生かしながら充実感が得られるようなイベントにできればと思っています。そのためには皆さまの積極的なご参加がぜひとも必要です。ともに盛り上げていってくださいますようお願い申し上げます。

■ 第1日:2月17日(火)

9:30~9:40 開会挨拶

9:40~12:00

シンポジウム
「大学教育に未来はあるか
—四半世紀の大学教育改革を振り返って—」

講演
講演:松下佳代(京都大学大学院 教授)
講演:溝上慎一(桐蔭学園・桐蔭横浜大学 理事長・学長・教授)

パネルディスカッション

モデレーター
田口真奈(京都大学大学院 准教授)
斎藤有吾(新潟大学 准教授)

12:00~13:00

昼休み

13:00~14:40

個人研究
口頭発表
(第1日)

13:00~13:20
13:20~13:40
13:40~14:00
14:00~14:20
14:20~14:40

発表1
発表2
発表3
発表4
発表5

オンライン発表
発表資料はウェブ掲載が望ましい
※1人あたりの時間20分
(発表時間 15分+質疑応答 5分)

14:40~15:00

休憩

15:00~16:30/17:30

参加者企画セッション
1日目(90分または150分)

オンライン発表

■ 第2日:2月18日(水)

10:00~12:00

ワークショップ
「AIで書く」を学生と体験する
—これからの評価を探る実践ワークショップ

田中一孝(桜美林大学 准教授)
斎藤有吾(新潟大学 准教授)

12:00~13:00

昼休み

13:00~14:40

個人研究
口頭発表
(第2日)

13:00~13:20
13:20~13:40
13:40~14:00
14:00~14:20
14:20~14:40

発表1
発表2
発表3
発表4
発表5

オンライン発表
発表資料はウェブ掲載が望ましい
※1人あたりの時間20分
(発表時間 15分+質疑応答 5分)

14:40~15:00

休憩

15:00~17:30

参加者企画セッション
2日目(150分)

オンライン発表

※すべてZoomミーティングで実施します



参加費

5,000円 (PDF版論文集代を含む)

学生・研究生は無料です (申し込みの際に、学生証等の画像データの提出が必要です)

※10月1日(水)に参加・発表申し込みを開始いたします。発表申し込みには、あらかじめ参加申し込みが必要です。入金確認後、2月13日以降に、発表要旨・ポスター・発表資料がご覧いただけるようになります。

できるだけクレジットカードでのお支払いをお願いいたします。

銀行振り込みも受け付けますが、その場合、入金確認には数営業日必要となりますので、余裕をもってお申し込みください。

参加申し込み

それではご覧ください

大学教育研究フォーラム 2026年2月17日

(シンポジウム) 大学教育に未来はあるか—四半世紀の大学教育改革を振り返って—

高等教育は改革進まず沈んでいくのか、それとも…

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問
東京大学大学院教育学研究科 客員教授

<https://smizok.com/>

E-mail mizokami@toin.ac.jp



【略歴】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、教授を経て、2018年に桐蔭学園へ。2019年同理事長、現在に至る。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。

* 詳しくはスライドの最後にあるプロフィールをご覧ください

本日の内容

- ① 30年の大学教育改革を振り返って
- ② コメントー高大接続と主体的・対話的で深い学び
- ③ これからの大学教育に向けた提言

本日の内容

- ① 30年の大学教育改革を振り返って
- ② コメントー高大接続と主体的・対話的で深い学び
- ③ これからの大学教育に向けた提言

改革は**30年くらい**経たないと成果は表れてこない？（と言われますが…）

「教育の世界では、変化の歯車は非常にゆっくりと回る。**環境としては30年前の教室と同じでも、教員にとっては(教育の)変化がすさまじいことを知っている。**デジタルコミュニティの中で作り、変化させ、学んで育ってきた世代にとって、アメリカの大学における伝統的な講義モデルはもはや適切なものではなくなっている。」

(Marks, 2013, p.21)

90年代以降の **大学教育改革** の主な歩み

- 30年
- (第Ⅰ期) 大学教育改革の始動 (1991-1997)
 - (第Ⅱ期) 組織的な教育改善の基盤づくり (1998-2007)
 - (第Ⅲ期) 学士課程教育の質的転換に向けて (2008-2013)
 - (第Ⅳ期) 高大接続を加えて学士課程教育の学修成果
・内部質保証 (2014-2024)
 - 【追加】**
 - (第Ⅴ期) 大学の経営破綻開始と大学教育の限界 (2025-現在)**



(文献) 溝上慎一 (2018). 大学生白書2018—いまの大学教育では学生を変えられない— 東信堂

(第Ⅰ期) 大学教育改革の始動 (1991-1997)

大学審議会『大学教育の改善について(答申)』(1991年)

大学設置基準の大綱化(1991年)

- 学生の学習意欲、授業外学習時間が問題であることを繰り返し指摘
- 教育システムの構造化：シラバス、授業評価アンケート、TA
- FDの推進(教員研修)

(第Ⅱ期) 組織的な教育改善の基盤づくり (1998-2007)

大学審議会『21世紀の大学像と今後の改革方策について(答申)』(1998)

- 約10年の総括。教育改革が始動したことは前進
- しかし、一方通行型の授業が以前と多い。
- ほかに成績評価が甘い、学生は授業に出席しない、質問をしない、授業外学習が不十分である。議論ができない。

特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)(2003年~)

- 3年間で約185大学・学部が採択。教育方法・カリキュラムの改善、学習支援、キャリア教育など

(第Ⅲ期) 学士課程教育の質的転換に向けて (2008-2013)

中央教育審議会『学士課程答申』 (2008)

- 学士力の育成
- 三つのポリシー (DP・CP・AP)
 - *学習パラダイム、コンピテンシーベースの教育への転換
「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」

今日の改革起点

- 教学マネジメント体制
- 内部質保証
- 学習成果の可視化

中央教育審議会『質的転換答申』 (2012)

- アクティブ・ラーニングの推進

(第Ⅳ期) 高大接続を加えて学士課程教育の学修成果

- 内部質保証 (2014-2024)

中央教育審議会『高大接続答申』 (2014年)

高校以下の「学習指導要領改訂」 (2017年)

- 主体的・対話的で深い学び (アクティブ・ラーニングの視点)
- カリキュラム・マネジメント (≒教学マネジメント)

中央教育審議会『令和の日本型学校教育答申』 (2021年)

- 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実
- 誰ひとりとして取り残すことのない

中央教育審議会『グランドデザイン答申』（2018）

- 新しい主張は少ないが、学士課程答申（2008）からの大学教育施策は継承
 - *学士力、コンピテンシーベース
 - *学習パラダイム、コンピテンシーベースへの転換
 - 「何を教えたか」から「何を学び、身に付けることができたのか」
 - *アクティブ・ラーニング、ICT活用
 - *三つの方針に基づく教学マネジメント
 - 中央教育審議会大学分科会『教学マネジメント指針』（2020）

(第V期) 大学の経営破綻開始と大学教育の限界

(2025-現在)

中央教育審議会『知の総和答申』(2025)

- 教育方法については、グランドデザイン答申を踏襲と述べられるが…

「教育内容・方法の改善については、個々の学生の学修の質と量を充実することが何よりも必要である。このため、授業方法やシラバスの内容の充実、厳格な成績評価や卒業認定の実施、学修支援体制の整備等、学生が主体的・自律的に学修するための環境構築を促進することが求められる。その際、各大学等が更に教育力を向上させ、全学的な教学マネジメントの確立を図ることが必須である」(p.18)

→学生参加型、アクティブ・ラーニングについては記載から消失

→大綱化以降の30年の改革が後退？

- 内部質保証、情報公表を強化

→これで前進できる感じはしない

- 初等中等教育との接続を強化するとは述べられてはいる。しかし、探究、ICT以外は何も言及無し

→今高校以下で進められている主体的・対話的で深い学び、探究、ICTを受け止め、さらに発展させる高等教育の力はあるのか？ あまりにも勉強不足。

→初等中等教育の「探究的な学び」を研究だと見ている点も勉強不足の感が否めない

- 都市から地方への動きの促進等を通じた地方創生の推進

「都市と地方双方が持続的に成長・発展し、大都市圏の高等教育機関が各地域の知の拠点形成や高等教育を受ける機会の維持に配慮するなど、都市から地方への動きの促進等の地方創生の推進に向けた取組を進めることが必要である。

（中略）大学進学希望者に対する大学入学定員（大学進学者収容力）が100%を超える東京都や京都府のような大都市圏においては、大学進学者収容力の都道府県格差の縮小を目指すとともに、地方圏の大学等との連携を進めることが、均衡ある国土の発展や地方創生の観点からも必要である。」（pp.45-46）

→是非実行してほしい。全国的な視座での定員の再配分

データから見る アクティブ・ラーニング の経験率

Q.あなたは高校の主要教科(数学、国語、英語など)で、ある問題を考えたり、発表したり、ディスカッションをしたりする参加型の授業にどの程度参加してきましたか。

Q.あなたは大学に入ってから、ある問題を考えたり、発表したり、ディスカッションをしたりする参加型の授業や演習にどの程度参加してきましたか。



電通育英会主催『大学生のキャリア意識調査2025』より

(文献)溝上慎一(2018). 大学生白書2018—いまの大学教育では学生を変えられない— 東信堂



本日の内容

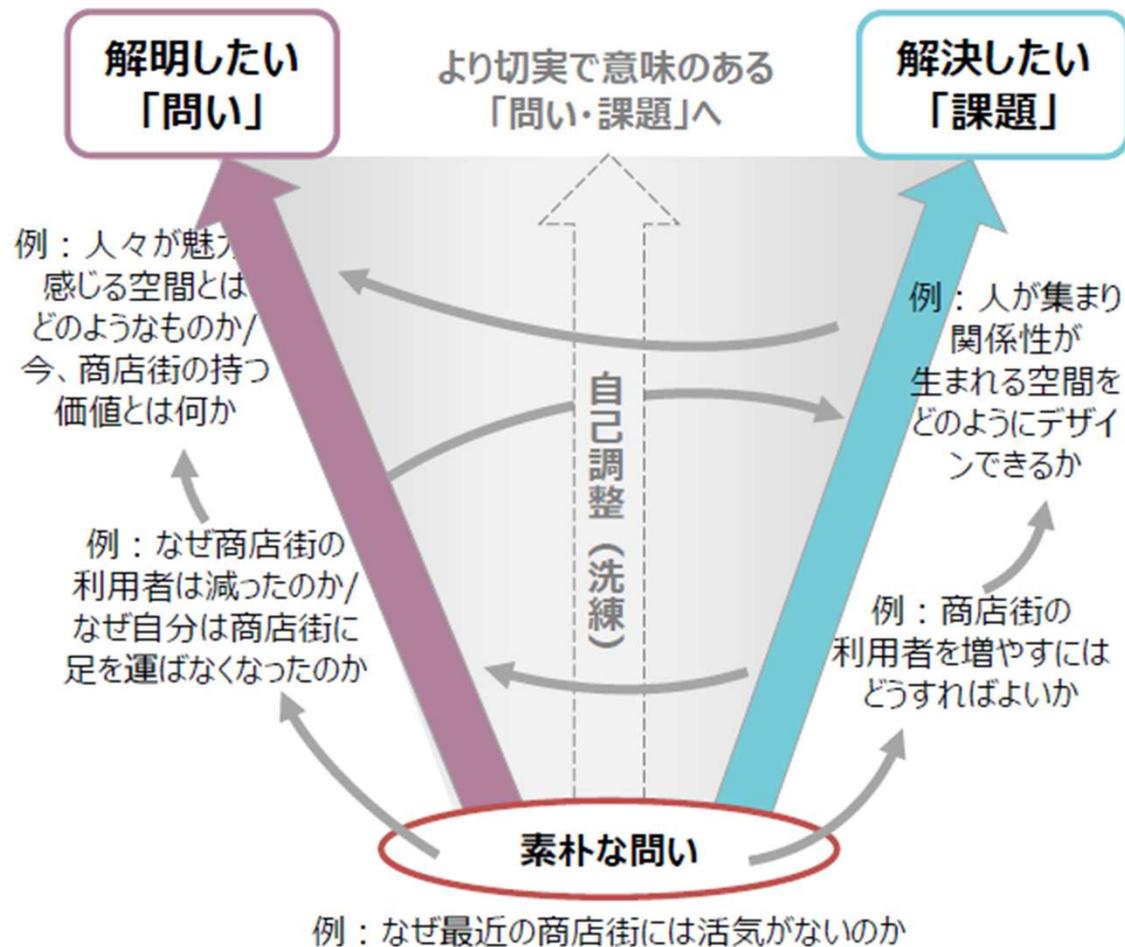
- ① 30年の大学教育改革を振り返って
- ② コメントー高大接続と主体的・対話的で深い学び
- ③ これからの大学教育に向けた提言

(コメント1) 高大接続 について

- 高校に教えに行ってあげるのが高大接続だと思っていないか？
- 探究的な学びにおいて、とくにSSH、産業教育（工業や農業など）においては青天井での取り組みとなっているものが目立つ
 - 高校も生き残りに必死であり、自身で高度な取り組みを目指している。大学に繋げようとは思っていない

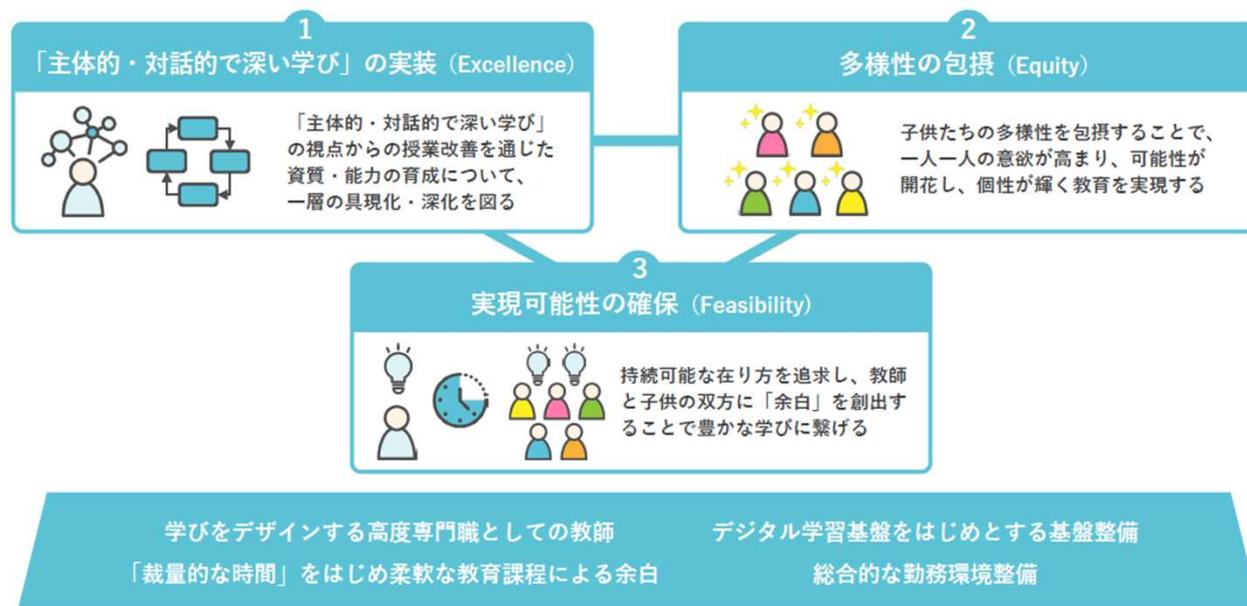
【補足】 問いと課題 の往還による課題の設定の仕方

『生活・総合WG(第3回)』(2025年12月26日)



データ・サイエンス、地域社会課題、STEAM等も重要であるが、自己の在り方生き方の徹底が求められる

(コメント2) 主体的・対話的で深い学び について



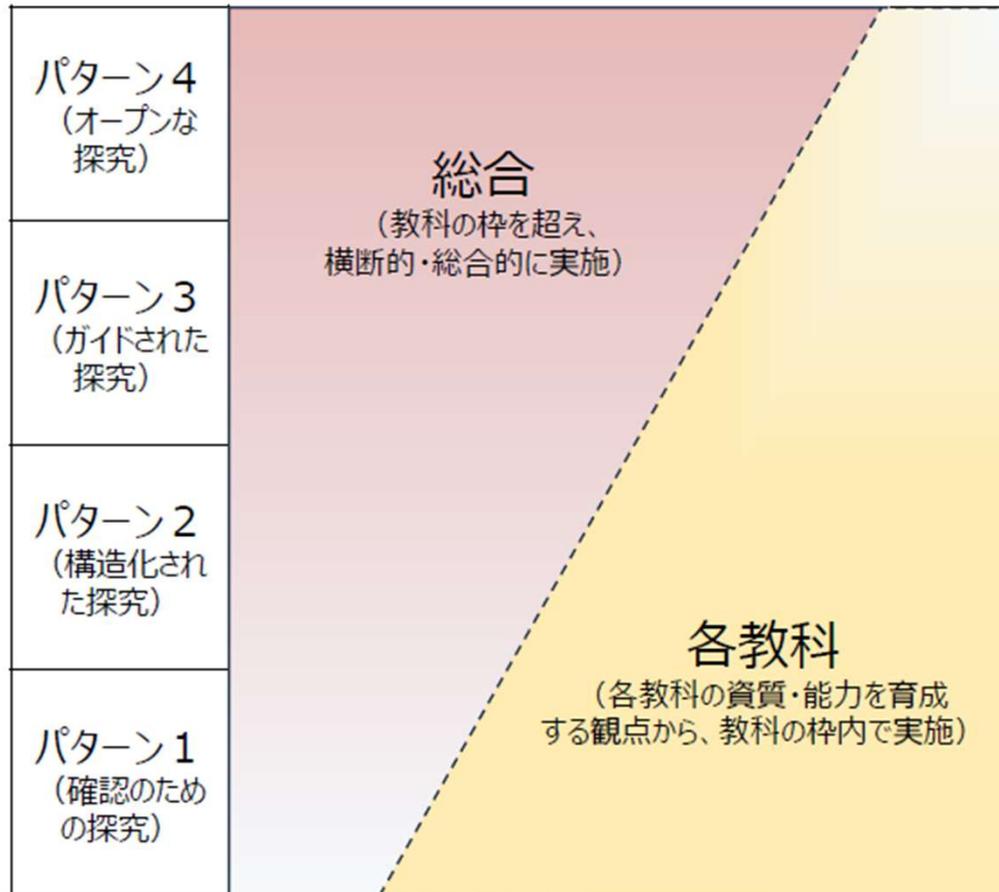
中教審教育課程企画特別部会
『論点整理(最新版)』(2026年2月)

多様な子供たちの「深い学び」を確かなものに

- 高校以下の探究的な学びは、次期学習指導要領に向けて、総合探究の質を高めるとともに、各教科等での取り組みへと拡げつつある
→大学は入学者（高校生）を受け止められるのか？

【補足】学習者の裁量によって深まる探究—各教科への拡充

『生活・総合WG(第3回)』(2025年12月26日)



- 習得・活用・探究
(平成20-21[2008-09]年改訂)
- 高校における数理探究や古典探究を
始めとする探究科目の創設
(平成30[2017]年改訂)
- 個別最適な学びと協働的な学びの一
体的な充実 > 『令和の日本型学校教育答申』
(令和3[2021]年1月)

【補足】学習者の裁量によって深まる探究—各教科への拡充

『総則・評価特別部会（令和7[2025年]12月15日）

動機づけ方略

質の高い学習を開始・継続することができるよう、自らの動機づけ（モチベーション）や感情を整える方略

学習課題の意義づけ・価値づけ

取り組む学習が、目標に照らして努力に見合う価値があると実感することで動機づけを高める

学習環境の調整

自身が学習に集中できるように学習環境を整える

他者との協働や支援の活用

友達に聞く、協働する、教師や保護者の支援を求めるなど、学習を進める上で必要な社会的リソースを整える

自己肯定感の維持

学習成果の要因を、変えられない又は外部的な要因（自らの遺伝的能力等）に求めず、自分で変えられる又は内部的な要因（学習方略等）で捉え、自己肯定感を支える

意思や注意のコントロール

学習に関係のない思考を抑え、学習の目標を達成するための活動に注意を振り向ける

学習方略

参考資料⑨参照

学習内容をよりよく理解し、定着するよう学習途中の情報処理の方法等を工夫する方略

反復方略

学習した内容が長期記憶として定着するまで、繰り返し学習できるようにする

精緻化方略

理由や意味を付け加えるなど、新たな学習内容を、既存の知識と関連付けて深く理解できるように工夫する

組織化方略

同じ点に着目して情報を整理する、内容を要約するなど、新たな学習内容の中で関連付けを行い、体系的に理解できるように工夫する

メタ認知的方略

学習方略がうまく働きよりよい学習成果に結びつくよう、自身の学習過程の計画・把握・調整・振り返り等を適切に行う方略

計画方略

学習活動に先んじて、学習過程の計画、目標設定、学習方略の選択等を行う

モニタリング方略

学習過程において理解度等を自分に確認することで、学習の進捗を確認する

評価方略

実際の学習活動終了後、学習の進捗を当初の学習目標と照らし合わせる

調整方略

学習目標を達成したか確認したあと、進捗状況に応じて自身の学習方略等を調整する

自己調整学習を促進する教師の関わり方の類型

- ①直接的な方略指導 : 教師が方略を意図的に指導することで、児童生徒の方略に対する認識と、具体的な行動を促す
- ②間接的な方略指導 : 教師は特定の方略を明示しないが、問いかけ等を通じて児童生徒の方略に対する認識と、具体的な行動を促す
- ③学習環境設定の工夫 : 児童生徒が自己調整学習を行う必要がある環境を設定し、児童生徒が自然と方略を工夫していくことを促す

【補足】 徹底的に **主体的・対話的(民主主義的)** な学び



本日の内容

- ① 30年の大学教育改革を振り返って
- ② コメントー高大接続と主体的・対話的で深い学び
- ③ これからの大学教育に向けた提言

これからの大学教育に向けた提言

- 学習パラダイムへの転換（アクティブ・ラーニング）を避けて大学教育の改善・発展は実現しない
 - 内部質保証、教学マネジメント等はこの上での連動
- 地方創生について…
 - 全国的な大学定員の再配分（コントロール）をホンキで行わなければ地方の未来には限界がある
 - 『知の総和答申』で謳ったことをこの文脈で実現してほしい
- 民主主義的な対話について
 - このようなことはほんとうは高等教育が率先してすべきことだったのではないのか？

- あるいは、中等教育完成論を謳って、高等教育は知識ベースで開き直るか？（ヨーロッパ型とは言わないまでも）
- 小さな火の芽を見逃さないように全国を取り組みを引き続き注視したい

本日の内容

- ① 30年の大学教育改革を振り返って
- ② コメントー高大接続と主体的・対話的で深い学び
- ③ これからの大学教育に向けた提言

ご清聴有り難うございました

プロフィール

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、2000年講師、2003年京都大学准教授、2014年教授を経て、2019年学校法人桐蔭学園理事長。桐蔭横浜大学学長（2020-2021）。京都大学博士（教育学）

河合塾教育研究開発本部研究顧問、東京大学大学院教育学研究科客員教授、電通育英会大学生調査アドバイザー、文部科学省初等中等教育分科会教育課程部会臨時委員、日本学術会議連携会員、大学・高校の各種委員。日本青年心理学会学会賞受賞（2013年）、日本教育情報学会論文賞受賞（2023年）

専門は、青年・発達心理学・教育実践研究（自己・アイデンティティ形成、学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジション、人生100年時代のキャリア形成など）。著書に『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（2014東信堂、単著）、『学習とパーソナリティ「あの子はおとなしいけど成績はいいんですよ！」をどう見るかー』（2018東信堂、単著）、『社会に生きる個性ー自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシーー』（2020東信堂、単著）、『高校生の学びと成長に向けた「大学選び」ー偏差値もうまく利用するー』（2021東信堂、単著）、『インサイドアウト思考ー創造的思考から個性的な学習・ライフの構築へー』（2023東信堂、単著）、『高校・大学・社会 学びと成長のリアルー「学校と社会をつなぐ調査」10年の軌跡ー』（2023学事出版、編著）、『幸福と訳すな！ウェルビーイング論ー自身のライフ構築を目指してー』（2023東信堂、単著）など多数。

<https://smizok.com/>



YouTubeチャンネル「溝上慎一の教育論」のご案内

AIの「知能」と比べて人に固有の

(新著の紹介)

「知能」とは何か? No367

不完全情報をもとに推論をする人の創造的可能性

楠見孝先生

(京都大学国際高等教育院 副教育院長 特定教授)



動画チャンネル「溝上慎一の教育論」

No281

協働の「専門家」への パラダイムシフトが期待される学校教師

木村優先生

(福井大学大学院連合教職開発研究科 教授・研究科)



溝上慎一の教育論「動画チャンネル」(基本的に毎週水・土に配信しています)

No369

(新著の紹介)

大学生の学びと成長

知識・他者・自分との関係から人生をつくる



河井亨先生(立命館大学スポーツ健康科学部准教授)

動画チャンネル「溝上慎一の教育論」

No271

G.ピースタの教育論 1

教えることの再発見

教えること(teaching)を教育
で軽んじてはいけない!



溝上慎一の教育論「動画チャンネル」(基本的に毎週水・土に配信して)

(新著の紹介)



溝上慎一 (編) (2025). 主体性総論—主体性とは何か、
なぜこれほど求められるのか— 東信堂
(2025年12月9日発売予定)

- 第1章 主体性論の基礎的視座
- 第2章 「主体性が立ち上がる」から「主体性を立ち上げる」へ
- 第3章 加速する文科省の主体性施策
—— “教える” と “学ぶ” のバランスを求めて
- 第4章 なぜ主体性が求められるのか